

川草んた 語川継か礼る島野浦



平成26年 3月改訂版

延岡市立島野浦中学校

しまんだ ～ 語り継がれる島野浦 ～

目 次

島野浦全景と地図（島野浦の位置）	1
島野浦の古地図名	2
島野浦中学校校章の由来	3
島野浦中学校の校歌	5
島野浦の歴史（遠見場山の祭り）	6
島野浦の大火‘二件’	10
今は消えた “ゆりこん柱”	12
蒲江村漁民と島野浦漁民との海戦逸話	13
島野浦戦災の話	14
島野浦メキシコ女王伝説	15
三十三番霊場と観音様参り	16
バクチバエの由来・おんばらい潮	17
島野浦の文化を築いた人たち	18
島野浦の主な年中行事	19
島野浦三十三番霊場について	21
しまんだの方言について	24
しまんだで語られている民俗知識（ことわざ・教訓）	26
しまんだの料理	27
しまんだの民謡	28
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"><ul style="list-style-type: none">○民謡○かつお船賛歌(第1部)○かつお船賛歌(第2部)</div>	
島野浦盆音頭	30～37
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"><ul style="list-style-type: none">○さいの川原 ○大和三太 ○八百屋お七○白滝○あわの鳴戸(第1部) ○あわの鳴戸(第2部)</div>	
島野浦の屋号	38～43
島野浦の船舶（漁種・用途別）	44
島野浦の絶景	45～46
編集後記	

校章の由来！

昭和29年度 制定
☆塩谷利雄教諭と生徒会校
章委員会との合作

○ 厳しい生活環境の中に島を離れていく若者が多かった。島を離れても、島の歴史・地理・生活・文化を忘れることのないようにとの願いを込めて制定された。



昭和29年 塩谷利雄教諭と生徒会
校章委員会との合作

① 三枚の葉は、メキシコ女王伝説にもつながる島に自生する南方系の植物ハカマカズラを意識して描かれた。また、ハカマカズラはワラともいい、紀伊風土記にも見られる植物で、島野浦の祖先の一部が、紀州から来ていることにもつながる。

(歴史的背景)

② 中心は島の生活に欠かせない船を表し、漁業を中心とした生活を象徴している。

(生活・産業的背景)

③ 左右と下の白い部分と点は、波と飛沫を表し、海に囲まれた離島であることを表す。

(地理的背景)

残る疑問点・・・

上記のように調べたのであるが、今回話途中で疑問点がでてきた。山本区長、島の郷土史研究家の結城さん、木津三郎さん、池田校長らが話す中で、いずれも校章の葉がハカマカズラではないのではないかという点だ。ハカマカズラは葉の先がハカマのように割れているのであるが、校章の葉は割れていない。校章制定当時、校章委員会にいたという城野加工組合長さんに電話で聞いてみると、城野さんはハカマカズラ（マンジュカズラ）として制定したとはっきり言われた。しかし、実際に写真やH24年5月21日に木津さんが採ってきた実物を見ると、ハカマのように先が割れてはいないうえに葉先のギザギザもない。皆の意見は一様に椎・クヌギではないか・・・？ 桜の葉では・・・？という意見もあったが、クヌギの意見が強いようである。

その後5月24日になって、漁協の岩田組合長が、カシを数種類採ってきてくださった。黒ガシ・白ガシと椎とのこと。見比べてみると黒ガシと白ガシには葉先にギザギザがあり、椎には明らかにギザギザはない。やや大きめの黒ガシの葉が、校章の葉に似ているように思える。

このような意見が交わされているが、現在はこれ以上確かめようがないので、上記のような記述で記録に残しておきたい。

平成24年 5月25日

島野浦中学校 教頭 崎田浩二

記録としての写真

写真1 黒ガシ (葉の長さ 約7~10センチ)



写真2 白ガシ (葉の長さ 約4~5センチ)



写真3 椎 (葉の長さ 約4センチ)



写真4 ハカマカズラ (ワンジュカズラ)



採取者 写真1~3 島浦漁協 岩田組合長 (H24, 5, 24)

写真4 地下住人 木津龍馬(三郎)さん (H24, 5, 21)

島野浦中学校の校歌

昭和30年 6月16日 制定

作詞 小嶋 政一郎

作曲 権藤 円立

- 1 日向灘 ながるる潮
いや遠く めぐりひろがり
いやふかく ますみに澄みて
われらここに 生いたつ
- 2 島野浦 さかゆる港
幸あまた ここに集り
ひとあまた むつみにむつみ
山も海もかがやく
- 3 学舎に 夢見るいのち
朝夕に みがき育くみ
春秋を きたえにきたえ
ふるいたたん わが友



島野浦の歴史

西 暦	年 号	事 跡
1532～1554	天文年間	この頃、福聚庵が創建される。
1557	弘治 3年	○島野浦に霧島六社大権現建立、この神社の棟札に土持親佐・親成領主の記述有り。
1578	天正 6年	土持氏が太友宗麟氏に滅ぼされる。 太友宗麟が島津義久に敗れ、領主は島津氏となる。
1587	天正15年	豊臣秀吉九州征伐。島津氏が秀吉に降伏し、大名国割の結果高橋右近将監元種が領主となる。
1596	慶長元年	○『南海日記残簡』（藤原惺窩）に島野浦に人が住んでいる記述有り。
1614	慶長19年	有馬左衛門直純に属し、直純・康純・永純三代に78年間領さる。
1661	寛文元年	紀州より人が移り住む。（土佐に出漁した縞松氏が遭難し、流れ着く？）
1680	延宝 8年	福聚庵開基（靈峯和尚） 綿津見命殿（後の島野浦神社）創立？
1692	元禄 5年	徳島県海南町より7人衆移住？三浦老岐守明敬が藩主となり、県（あがた）藩を改めて、延岡藩となる。
1712	正徳 2年	藩主三浦明敬が三河に移され、牧野成央が藩主となる。
1720	享保 5年	長野又六（2代目庄屋）が島野浦神社新神殿建立。
1737	元文 2年	長野又六が福聚庵を再建し、台雲時の末寺として認められる。
17??		初代清田清右衛門による棒受網発明。
1747	延享 4年	藩主牧野貞道が常陸に移され、内藤備後守政樹が藩主になる。
1781	天明 元年	島野浦大火（1月29日午後2時頃）地下・奥納屋全焼 （消失家屋52戸、納屋11戸、被災者260人）
1810	文化 7年	伊能忠敬らが、延岡・佐土原・飢肥を測量する。
<p>※4月3日に島野浦を測量 天 候：曇り 小南風 測量者：伊能忠敬 外15名 宿舎・本陣：長野角次宅 脇 宿：百姓 十五朗宅 全島周囲：三里三町四十四間二尺五寸 測量起点：野坂内浜 資料提供者（長野 梧楼氏）</p>		
1841	天保12年	島野浦霊場（西国3ヶ所）完成
1854	安政 元年	大地震と大津波のために3日間山中に避難する。
1859	安政 6年	島野浦にコレラが流行し、多くの人々が亡くなる。 （串間・油津・飢肥・折生迫・高鍋などでも流行）
1860	万延 元年	僧侶恵等が来島する。福聚庵が独立して福聚寺となる。
1868	明治 元年	延岡藩は、旧幕府側に属し、鳥羽・伏見の戦いに出兵する。
1871	明治 4年	延岡藩が廃止され、延岡県となる。

西 暦	年 号	事 跡
		延岡県が廃止され、美々津県に所属する。
1874	明治 7年	綿津見 ^{わたつみのみこと} 命 殿を島野浦神社と改称？ 島野浦小学校（人民共立小学校）創立 地下？
1883	明治16年	鹿児島県から独立し、宮崎県に所属する。
1887	明治20年	島野浦大火（地下・奥納屋を中心に焼失家屋110戸）
1889	明治22年	市制・町村制が施行され、島野浦村は南浦村に所属する。
1892	明治25年	大敷網漁2ヶ所に敷設。
1895	明治28年	火災により焼失した島野浦神社が再建。
1901	明治34年	島野浦小学校開校（現在地：宇津木に移転？） 島野浦沖海戦（蒲江との大喧嘩）
1903	明治36年	島野浦漁業組合設立。
1906	明治39年	島野浦巡查駐在所設立。
1913	大正 2年	島野浦小学校に高等科併設。 日高式大敷網の発明。
1922	大正11年	島野浦郵便局開局。
1923	大正12年	日豊本線が開通。
1928	昭和 3年	きんちやく網操業開始。
1929	昭和 4年	定期船「南浦丸」（個人経営：延岡～島野浦 就航） 海底送電線・電話線施設完成。
1930	昭和 5年	宇津木 ～ 地下間海岸埋め立て。
1932	昭和 7年	地下防波堤完成。
1933	昭和 8年	延岡で市制が施行される。 宇津木防波堤完成
1937	昭和12年	島野浦からも日中戦争に従軍し、多数の戦死者を出す。 島野浦灯台完成。 船着場給油施設完工。
1940	昭和15年	延浦航運株式会社 (日豊汽船の前身、佐伯～延岡間で途中島野浦に寄港)
1941	昭和16年	島野浦からも太平洋戦争に従軍し、多数の戦死者を出す。 島野浦沖で、江りい丸が撃沈される。
1945	昭和20年	島野浦沖で、海軍駆潜艇と米軍が交戦する。 (3.5.) 延岡大空襲 島野浦も空襲を受け、6名が戦没。 (5.2.) 枕崎台風で小学校全校舎倒壊
1947	昭和22年	延浦航運から日豊汽船に社名変更 「第2日豊丸」（宮野浦～島野浦～延岡 就航） 小学校2階校舎が完成。 島野浦中学校創立、小学校に併設開校。
1948	昭和23年	南浦村役場支所開設 島野浦無電施設開設。
1949	昭和24年	島野浦漁業協同組合 加工協同組合設立
1950	昭和25年	きんちやく船に初めて電波探知機を付ける。(新龍丸)

西 暦	年 号	事 跡
1952	昭和27年	製氷工場完成 「かもめ」(島野浦～熊野江)就航 「第10日豊丸」(蒲江～島野浦～延岡)就航
1954	昭和29年	島内簡易水道通水開始
1955	昭和30年	延岡市に合併して、延岡市島野浦町になる。
1956	昭和31年	佐伯航路(日豊汽船)廃止。
1957	昭和32年	町区町名が改正され、延岡市島浦町となる。 島野浦港が第2種漁港の指定を受ける。
1958	昭和33年	島野浦中学校新校舎落成、現在地の宇治へ移転。
1959	昭和34年	離島振興法により、島野浦漁港修築事業に着工する。
1960	昭和35年	港内全域のコンクリート護岸がほぼ完成。 バス路線(延岡～熊野江)開通。
1961	昭和36年	島野浦中学校へき地集会所落成 島野浦保育所開設
1965	昭和40年	宇治トンネル(島野浦隧道)開通。山越通学解消。
1966	昭和41年	延岡～南浦～北浦を結ぶ県道完成。 島野浦給食センター開設(学校給食開始)
1970	昭和45年	島浦診療所開設。島浦カーフェリー就航期成同盟会発足。
1974	昭和49年	日豊海岸が国定公園に指定される。
1977	昭和52年	島野浦電話全面自動化。 延岡新港の使用開始。
1978	昭和53年	島野浦～浦城～北浦航路廃止。 「につぼう」正式認可。 国道388号線追内バイパス(川島～浦城間)開通。 「につぼう」の航路。浦城～島野浦墓の谷西港に変更。
1979	昭和54年	島野浦簡易水道海底送水新設。(熊野江～島野浦)
1980	昭和55年	島野浦開発総合センター完成。
1982	昭和57年	島浦町漁村広場(神社公園)完成。 し尿運搬船「第二清延丸」廃止。
1983	昭和58年	市営住宅(30戸 墓の谷)完成。 白浜西防波堤改修工事。 可燃物(生ゴミ)収集開始。
1988	昭和63年	高速艇「クイーンにつぼう」(浦城～島野浦中央港)就航。
1989	平成 元年	カーフェリー「につぼう2」(浦城～島野浦西・宇治港)就航。
1990	平成 2年	宇治魚港埋め立て(第1期完成)
1992	平成 4年	中学校のプールができる。 スポーツ施設「マリinbox」完成。
1994	平成 6年	宇治漁港埋め立て(第2期完成)
1995	平成 7年	島野浦隧道補修工事。 秋祭り島おこし開始。
1998	平成10年	島浦町架橋促進期成会(当地)
1999	平成11年	下水道浄化施設落成。(墓の谷)

2000	平成12年	デイサービスセンター開所。
2001	平成13年	サンポート島浦公園竣工記念式典・花火大会。 防犯無線設置。
2003	平成15年	中学校新校舎落成。 直販施設「ふれあい」落成。
2005	平成17年	寺・観音堂修復工事完成。
2007	平成19年	海底送水管新設に伴い、ケーブルTV敷設。
2008	平成20年	島野浦～熊野江海底水道管改修工事完工。 神社公園にWC設置。
2009	平成21年	離島センター防水工事。 調理場・水道工事。 トンネル内修理。 第1回北浦～島野浦横断遠泳大会。
2010	平成22年	宇津木護岸工事完工。 宇津木湾舗装工事完成。 御輿改修。 オオスリバチサンゴ保護区設定作業。 サンゴ協議会。
2011	平成23年	金比羅新築。 いきいき集落認定。 珊瑚保存会会議。 サンゴグループ島内清掃。(日井) 防風ネット完成(赤波止) 第2製氷所工事完工。 映画「ここに生きる撮影」 NHK来島「そこに島があるかぎり」撮影。
2012	平成24年	島野浦神社新築上棟 完成(11月) ※新築後秋祭り (☆完成時島野浦区区長：山本万興 氏)
2013	平成25年	宇津木防風ネット完成(和田造船裏) [※豊徳丸新造船就役]

参考文献資料：元島野浦中学校社会科教諭 渡部誠一郎著「郷土島野浦～語りつぐふるさと」より
第13代島野浦中学校校長古川昌晴校長・磯部功一教頭 編集

「しまんだ～止むことのない時の流れの中に～」より

最新調査資料：島浦区区長 山本万興氏 調査資料より

(平成7年以降) 島野浦漁協組合長 岩田末幸氏 調査資料より

遠見場山の祭り

その由来(聞き取りによる)

- ◎ 1830年西国33ヶ所を模して島野浦霊場をつくる。その時観音菩薩と地蔵菩薩の寄進を各戸より受ける。各霊場とも寄進者世襲として旧暦1月24日にお祭りをする。その時世襲家以外の島民もいっしょにお参りをし、一日を楽しく過ごす。
- ◎ 島野浦に、かつて2回の大火が発生し大被害を受ける。また悪疫(コレラ)の発生により、多くの人命を失った。旧暦1月24日は、北郷村宇納間地蔵さん(火伏の神様)のお祭りにあわせ、島野浦からもお礼をもらいに行かれる。それにあわせて、島内でも地蔵さん参りをして祈願するようになった。

すなわち無病息災を祈願し、春到来を祝い、漁業従事者の家族団らんの機会を設けるための伝統的な行事であると考えられる。

島野浦の大火 二件！

～ 資料 「火と水との戦い」 より～

島野浦では、過去2度の大火を経験している。いずれも島の大半を焼失するという痛ましいきごとである。火事の恐ろしさは島民の心に脈々と伝えられ、現在でも消防団が巡回と呼びかけを行っている。

その1

安永10年(天明元年) 1月29日の大火

安永10年(この年に改元して天明元年となる・・・1781年)正月(1月)晦日(29または30日)に大火があったことは、『内藤家文書万覚書』に記録されている。(以下は、西村祝一『火と水との戦い～郷土物語』火と水との戦い刊行会、1966年P120の書き下し文より、現旭中勤務渡部誠一郎教頭先生が、現代文になおしたもの。)

去年(先月、つまり1月のこと)晦日の昼八ツ時過ぎ(午後2時～3時)、島野浦組合頭利兵衛という者の居宅から出火、折しも北西の風が強く、同所(島野浦)庄屋長野家居宅をはじめ、3～4軒に火が移った。浦(島野浦)の人たちは、山仕事などに出かけていたため人数が少なく、白浜からおいおい駆けつけた時には火勢が強くて、道は通れなくなっていた。ようやく4～5人が海中を渡って駆けつけ、御高札(幕府や藩の布令を発する時に、文面を木の立て札に書いて立てるもの)を取り外し、折良く、紀州塩浦与右衛門という者の船が居合わせていたので、その船に積み込んだ。その他、美々津船、佐土原船、蚊口(高鍋)船、赤江(宮崎)船などがいた。これらの船を使って御茶屋(地下にあった藩主の休憩所)を中心に、火を消し止めようとしたが、風が強くどうすることもできなかった。御茶屋をはじめ41軒、他に納屋11軒、氏神社まで焼失した。焼け残ったのは、百姓の家一軒、空き家一軒、物置一軒だけであった。

また宮野浦六ヶ組、庄屋らがおいおい駆けつけてよく働き、御用帳面などはあらましとり出すことができたが、小札差は庄屋宅の2階の部屋に置いてあり、最初にその部屋が焼失したために取り出すことができなかった。御茶屋にあった道具については、ようやく少し取り出すことができた。その品々は左の通りであると同所(島野浦)庄屋(長野)助右衛門より書き付けをもって申し出ている。また火元になった人は、恐れ入っているので、旦那寺である須怒江村(須見江)の普門寺へ預け入れたい旨を郡奉行へ書面をもってお聞きしている。

このような次第で、食料が得難い状態であったので、米を15石ほどお貸し下さるよう、代官まで願い出ている。また、郡に対しても書面をもって、家を36軒と280人に米17俵を貸し与えていただくようお願い申し上げた。それぞれ相談、吟味の結果、赤米32俵を貸し与えることにした。年貢については、無利息で5年分の分割による上納(年貢を納めること)でよいことになる。

その2

明治20年(1887年)の大火

安永20年の大火からほぼ100年を経た明治20年(1887年)に、再び大火が起こっている。この時の大火についても、西村祝一『火と水の戦い～郷土物語』火と水の戦い刊行会に詳しい記録がある。なお、『火と水との戦い』では、当時延岡市消防団南浦分団長であった長野開朔氏からの聞き書きであるが、平成7年(1995年)現在、すでに当時からの存命者はなく、貴重な聞き書きとなっている。下記はほぼ原文のまま転載したものである。

旧暦正月29日、地下から起こった猛火は見る間に飛火して、島野浦神社をこえて奥納屋まで猛威をふるい2部落のほとんどが全焼した。消防組の前身である若連中が必死の消火活動をしたが、当時の消火器具は貧弱な龍吐水であり、また出漁中の出来事であるために若連中の数も少なく焼けるにまかせる状態であった。老人達は、伝馬船に家財道具や女子供を乗せて港の中に避難したが、火熱がひどく港の中ほどでも露出している顔面など熱くて、とても岸に近寄れず、積んだだけのものを沖に漕ぎ出すほかはなかった。この時、白浜部落では保長(区長のこと)や老人など残余の者どもが皆集まって、ぬかづき合掌し、

「南無八大竜宮、塩竈大明神、愛宕将軍、何卒この白浜部落をこの火災から免れさせたまえ。祈願成就のあかつきには最も困難な寒中に素裸となって海中に柱を立てます。」と島野浦神社に一心不乱に念じたのである。

ところが、神のお聞き入れがあったのか不思議にもお社の屋根から、一羽の真白い鳥が飛び立ち、白浜部落の上空を飛んで小村(こぶら)の丘の柚の木にしばらく体を休め、真白い翼を2、3回羽ばたくと不思議にも火が衰えはじめ、大願成就、白浜部落はかろうじて火難から免れることができた。

旧暦10月29日の夜になると、火難を免れた白浜部落ではどこからともなくかけ声が起こってくる。

コレワイサーノ・フン・エーイ

コレワイサーノ・フン・エーイ

子供の声、老人の声、若連中の声がこだまする。すると部落民は海岸に集まってきて、用意されたウラジロ(シダの一種)に火をつける。素裸になった若連中たちは体をひとあぶりした後、松明をかざし、全長20mの杉柱を担いで海中に浸かっていく。・・・以下は、「今は消えたゆりこん柱」の章に詳しく掲載してあります。ここでは、重複を避け割愛いたします。

第13代島野浦中学校校長古川昌晴校長・磯部功一教頭 編集

「しまんだ～止むことのない時の流れの中に～」

渡部誠一郎教頭「郷土 島野浦」＝語り継ぐふるさと＝ より

今は消えた “ゆりこん柱”

～ 旧暦11月5日の祭礼1週間前の行事 ～

明治20年1月29日、地下からでた火は強い風を受け、島野浦神社の下を過ぎ、奥納屋まで延焼した。“若連中”たちは、力の限り消火に当たったが、火勢を弱めることはできなかった。船に家財道具を積んで避難した者も港の中では熱気を感じて沖に出なければならなかったほどであった。

白浜地区では、区長らが集まって神に鎮火を祈った。「八大竜王様、愛宕大権現様、塩竈大明神様、どうぞ火災から白浜地区を守ってください。この願いを聞きとどけて下されば、最も寒いころに“真っ裸”になり、海に入って困難な“柱立て”をいたしご神燈を奉納します。」と、島野浦神社に懇願した。

やがて、火の粉の散る黒い煙につつまれた空に、一羽の白い鳥の姿が見え、神社の森の上から白浜地区の上空を舞い、小村の丘の柚の木にとまり、大きな羽ばたきをした。すると強く燃えていた火勢がおとろえ、白浜地区は火災からまぬがれた。地区の人たちは、「白い鳥は、神様の森から飛び立った。きっと神様のお使いだ。」といい、以後そのお礼として、10月29日には、島野浦神社前の海中に素っ裸になって柱を立て、1年12ヶ月にちなんだ12個（閏年は13個）の“ご神燈”を飾ることになった。柱の大きさは、直径40cm、長さ約15mで、道具を使わずに海の中にゆさぶりながら立てていくので、「ゆりこみ柱」から「ゆりこん柱」と呼ばれるようになった。

現在は、海が埋め立てられ、その行事ができないが、柱を立てる直径約40cmの穴は作られている。

—昭和30年代まで行われていた—

“ゆりこん柱”の行事

旧暦10月29日ともなると寒さが厳しい。夜になり、潮が引き始めるころになると、白浜地区では「これわいさ一の、ほ一えい。」という声とともに“ご神燈組”の若連中は、海岸に集まってくる。子ども達の子若衆は長さ2mの松明を持って、かけ声合わせて海岸に向かう。砂浜には大きな「たき火」が燃え、裸になった若者達が体を温めた後、太くて長い柱を持って海に入り、干潮時の海中に柱を立てようとする。それを子ども達が妨害する。柱を支える綱を持つ若者に松明をぶつけ、砂を投げつける。若者達は、「ゆりこめ」「ゆりこめ」のかけ声で柱を立てる。こうした激闘が一時間余りも続き、ようやく柱が立つ頃には、潮が満ちてくる。白浜地区の行事であるため、地下地区などから“養子”に来ている若者は、最も苦しい柱の根本の担当をさせられたという。飾るご神燈には「白浜若連中」の文字が大きく映し出されている。

柱立てが終わると、若連中や子ども達は、白浜地区の当番家に、それぞれどんぶりや箸をもち、それを叩きながら音を立てて集まってくる。当番家では、島野浦名物料理の魚飯（ぎよはん）が出る。白菜や大根、魚、あげみ、などを炊き込んだ汁をご飯にかけた魚飯を腹いっぱいいただき、ゆりこん祭の締めくくりとする。

若連中

16歳から30歳までの青年。

（主に消防・夜警・葬儀などの世話をした。）

蒲江村漁民と島野浦漁民との海戦記録

～ いわし棒受網入会漁場・採藻権問題で大げんか ～

— 山本万一，畦原金之助両翁（当時20歳）の思い出話から —

「ほーら，蒲江が来たぞ！蒲江が来たぞ！」と見張りの声をする。明治34年夏の朝のことである。蒲江から「てん草」を採りに50～60艘の船団が近づいてくる。「そら来たぞ！」島野浦勢は8丁艘の大船6隻に乗り込んで戦闘態勢をとる。

竹槍，石灰，とり灰，まさご（小石），大湯釜など悲壮な覚悟で家族との別れの杯まで交わした若者もあったという。

当時，てん草の繁茂する島野浦東北端「猫が沖」では，口げんかなど再々あって不穏な空気が流れていたもので，蒲江村長山田和三郎氏も同船していた。

「そーらやれ！」石灰20俵・とり灰で目つぶしに出る。「村長に湯をかき！」大釜に沸かした煮え湯をあびせかける。（湯が冷めないように米を炊き込んだ粥である。）「懲役に行くなら島ん者全部じゃ！やれ，やれ！」海面は大修羅場と化した。意表を突かれた蒲江勢は，如何ともしがたく，この暴挙にほうほうの体で逃げ帰ったという。八丁艘の一丁は「おことお婆さん」という人が漕いだともいう。

この戦いは島民が，知恵を練りにねった問答無用の一方的な暴挙であつたらしい。

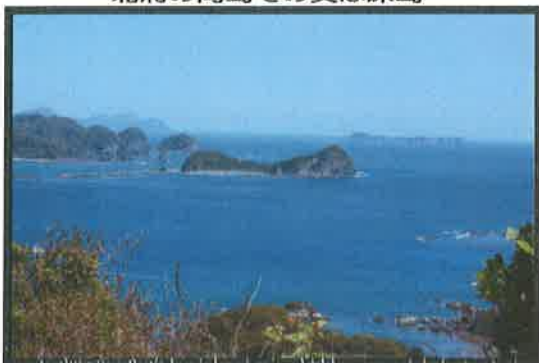
「小学校のころでこれを見ん ものと野坂の山や 小池の鼻に見に行った。」（片野勝助さん）

蒲江勢は，その後ろ姿も見せず，島ん者は懲役に行くこともなかった。「日向ん者は蒲江ん海に死んだか来，あん時火傷ん傷ざ，まだ治らんとぞ！」

深島は島の周り6km，大分県蒲江村に属していたが，島野浦は慣習によってこの深島を漁場として「いわし棒受網」の出漁をしていたが，蒲江勢がやかましく言うので「深島の棒受網の交換条件として島野浦のてん草採りを許す。」と当時の組合長今原源吉氏が約束したという。しかし，てん草採取の新しい方法を蒲江から習ったという因縁があつて，蒲江側の腰が強かつたという。てん草の収益が，当時は一カ年の家計の半分を支える貴重なものだっただけに，この暴挙にでたものと思われる。

てん草は，5月ごろに収穫されるが，当時は消防組が管理し，毎年てん草の付着状況を調査し，口開きは消防が時間を定め，旗などの合図で始めたものである。第1日は消防が採取するが，消防の年々の諸経費は，それでまかなつたという。その後は別々の日を定め，個人が採取するのが島の掟であつた。

北浦の高島その奥は深島



波越しから見た沖の平



島野浦戦災の記

～ 鎮魂のために ～

『駆潜艇事件』 延岡空襲 (第2回)

昭和20年3月5日 日向灘沖哨戒中の駆潜艇が、島野浦沖合で浮上中の米潜水艦を発見、爆雷で攻撃したところ、逆に空母艦載機グラマン300機余りが来襲し、交戦したが大損害を受け、島野浦港へ逃げ込んだ。

「全艇ことごとく破損、小浦・宇津木等の遠浅に座礁、大声にて救助を求めたり。村民は驚き、即時に伝馬船にて死傷者の収容をなしたり。中でも女子青年団員は、負傷者の看護にりりしき活動ぶりをみせたり。」

河野茂彦氏の記録

(郷土展望 15号 夕刊ポケット より)

『島野浦空襲』 第2話 延岡空襲 (第4回)

昭和20年5月2日、午前8時過ぎ米航空母艦からのものかロッキード(双胴)1機偵察爆撃機が島野浦を急襲しました。港には駆潜艇が3隻おり、直ちに交戦しました。ロッキードは何回となく旋回し、空襲するので、水兵多数は海へ飛び込みました。

部落には焼夷弾が投下され、機銃掃射も受けました。この日はお祭りで、男子消防団は、延岡に出たばかりでした。部落の一部に火災が発生。消火のため当時警防団第一部部长だった山本花子さん(24歳)は、率先垂範消防の指揮をとっていましたが、機銃弾が頭部を貫通して殉職されました。また、池田高利氏(32歳)も機銃弾に倒れ、殉職されました。この二人の勇敢な奮闘は忘れてはなりません。

ロッキードは、さらに授業中の島野浦小を機銃掃射したため、長野栄二(13)、島田光代(13)、山本豊生(14)、富田速男(14)の学童も死亡し、他にも負傷者を出しました。

(太平洋戦争 延岡空襲戦災記より)

島野浦メキシコ女王伝説!

安政年間のマカ不思議!

安政年間のある夏の日、太陽は五丈礁の真上に輝く……

1艘のかつお漁船が、大漁旗を潮風になびかせ島浦港へと帰りを急いでいた。港まであと3海里離れた体を船上にぼんやりと立っていた新米のカシキ（少年漁夫）の仁佐吉が、ふと前方に漂流している大きな木箱のようなものを見つけた。

メキシコ女王の遺体??

仁佐吉少年は、不思議に思ってそばにいた同僚の捨松少年、長八少年の袖を引いて、海上の不思議な物体を指さした。かくするうちに船中の12人の漁師が集まり、皆不思議な箱に視線を注いでいた。船が近づくと、その箱には何とも言えぬ海草のようなものやカキ殻などが付着しているのが見えた。箱は厚い黒みがかかった木で作られた長さ1間、高さ4尺、幅3尺もあろうかと思われる密封された木箱で、何とも異様な雰囲気がした。

★ぶかり・ブカリと四角の木箱★

源吉老船頭の指図で、ともかく引き上げてみることにした。荒くれ者の海の男達、何ものにも物怖じすることのない若者達ではあったが、気味悪げに手斧を振るって箱の一部を砕いてみた。恐怖と好奇心が入り交じった視線が箱の中に注がれる……と同時に驚きの声と声にならないような呻き声を発し、皆たじたじと後ずさりをした。物怖じしないはずの男達を震え上がらせたものは……ポッカーと開いた木箱の一部から見たものは……青白く白骨化した人間の顔とそれにまわりついているふさふさとした金髪であった。そしてその上には何という石であろうか、金目鯛のような目よりも赤い石、海の色よりも青い透きとおった石、ネコの目の玉のように光る石などをたくさん鏤めた金の冠、目を射るような燦然とした輝きであった。あまりに思いがけない出来事に漁師達はただ驚くばかりであった。

この突然の出来事に、声を震わせながら話し合う源吉老船頭以下の主だった漁夫達……久兵衛漁夫が「こりゃー 紅唐人の棺ばい。ともかく宝物がようき入っちゃるばい、宝物だけ取り出して、棺はこのまま流してしまおうや。」と提議すれば、満吉じいは「でしなこっちゃ、そんげんこつすつとあとんたたりが恐ろしか。元ん様に海に流すこつが一番いいと思うがの。」……賛否両論なかなか話がまとまらない。船は早くも島野浦南端の沖の小島の前にさしかかっていた。分別ある源吉じいさんは、「とにかく船を沖の小島につけて、よく箱の中を調べて、今後どうするかを相談しようじゃないか。」……「それがよかろう。」と、皆の意見がまとまり船を小島に着けた。小島の磯辺に箱を引き上げ、苦心して箱をこじ開けて二度びっくり。青・紅・緑・色とりどりに光る石、白い玉もある。これは以前上方商人が一個三両という大金を出して買い取っていったことのある真珠である。長い紐につながれたこの真珠、いったい何千両の価値があるのか想像もつかないほどである。

なおよく見ると白骨の肩のところに厚い革表紙の本が一冊入れてあった。それには何が何だかわからない記号のような横文字がいっぱい書いてあるだけでとんとわからない。

ここでもまた「宝物だけ持ち帰ろう。」……「あとんたたりが恐ろしか。」この時、源吉じいは皆の者に厳かな声で言い渡した。

「皆の衆、今日おれ達は、まことに不思議な出来事に出くわしたが、こうして考えるとまるで夢のようじゃ、海神様が夢を見せて下さったと思い、すべて忘れるのじゃ、そのためこの棺は深い穴を掘って埋めよう。人の死棺を暴いたことは、あとのたたりが恐ろしい。またこのことがお上に知れたら皆どんなお咎めを受けるかわからんのじゃ。いいかい、皆の衆、今日の出来事はどんなことがあっても、他人に話してはいかん。たとえ、家族であっても話すことは相成らん。また皆の衆も今後二度とこの島に上がることも相成らん。ここで皆の衆、固く誓ってくれ。」

分別ある老船頭のこの言葉に一同深くうなずき、各人も絶対に他言せぬことを誓いあったという。

当時カシキだった捨松少年も昭和3年1月9日4歳で没し、仁佐吉少年も昭和4年2月9日3歳でこの世を去った。今は確かめるすべもない伝説だが、当時メキシコに内乱があつて、女王の遺骸を箱に入れて流したという史実があるとのことから考えると、益々興味のある話である。

— 出典 夕刊デイリー —

三十三番霊場と観音様参り！

その1

海にせり出すように迫る山々の尾根沿いに石造りの観音様が三十三体安置されている。この観音様は、一番から三十三番まで番号がつけられ、「安産」「病気」「商売繁盛」などの神様になっている。これは、紀州の高野山をまねたものといわれている。

旧暦1月24日には、島民こぞって観音参りをするしきたりになっている。この観音様ができたのは、天保時代のはじめ、当時は飢饉の多いところで、全国的に百姓一揆が起こっていた。島民は生涯に一度は高野山参りをするのが夢であった。しかし飢饉続きのため、とても参拝に行くことなどできなかった。そこで、庄屋の長野助左衛門が高野山に似せて観音様を三十三ヶ所に配置した。それ以来、島民は島内の観音様を巡り高野山参拝を代用するようになった。

この観音様は台座1.5m、高さ60cmの石造りで、海が一望できる見晴らしの良いところに安置してある。以前は、その周囲に樹齢七・八百年の老松が茂っていたといわれるが、今その切り株のみが名残をとどめている。

その2

1830年西国33ヶ所を模して島野浦霊場を造る。その時各戸から観音菩薩と地藏菩薩の寄進を受ける。島民は、旧暦1月24日に三十三ヶ所巡りをし、幸せな生活を喜ぶ。なお各霊場とも寄進者の世襲制となり、現在も寄進家によって、管理され祭られている。

その3

島野浦にかつて2回の大火が発生し、大被害を受けた。また、悪疫（コレラ）の大流行により、多くの人名を失ったこともあった。旧暦24日は、北郷村宇納間の地藏さん（火伏の神様）のお祭りが行われる。島野浦からも、地藏さんのお礼もらいに出かけられる。それにあわせて、島内でもお地藏さん参りをして、安全を祈願するようになった。

第13代島野浦中学校校長古川昌晴校長・磯部功一教頭編集

「しまんだ〜止むことのない時の流れの中に〜」より

海賊達のバクチ場 “バクチバエ”

バクチバエの名のおこり

【その1】

昔、島浦に海賊がいて、戦利品を分配したり、持ち金をかけるため「きょうは海も凩いじよるし、日和りも良いし、チョイとやるか…」といったぐあいに、小舟を出して岩礁にあてがい、丁か半かをやっていた。いくら海賊でも役人の目は怖い。だから人目につかない場所を選んだわけだ。役人が後を追ってくると、彼らはサイコロを投げ捨てて証拠を隠した。そのサイコロが飛んでいったところが、「ナゲシバエ」（投石礁・投四礁）であった。“投四”は、投げたサイコロの目が、“四”だったところからその名がついた。

【その2】

北浦一帯は、昔から漁業が盛んで、漁師達は一年間せつせと働き、お金をガバッとためると住民達は誘い合って、バクチバエに小舟を出した。海上に浮かぶ小島のこと、役人には簡単に見つからない。それでも四方・八方に気を配り、おもむろにサイコロを出し「丁・半コマそろいました。では、入ります。」これまた役人に見つかりそうになると、サイコロを投げ捨て飛んでいったところが「投石（投四）礁」だという。

【その1】・【その2】の違いは、島浦の海賊と北浦の漁師だけの違いで、あとは同じ内容になっている。この二つの伝説、どっちが本当かわからないが、島浦町と北浦町阿蘇のほぼ中間にあり、「島浦んとじゃ」・「いや北浦もんじゃ」と現在も領有権論争が、古老達に聞かれるのも地名から見ておもしろい。今日もまた、いつ釣れるかわからない大物を狙って、まさしくバクチのような釣りを楽しんでいる人たちがいる。

おんばらい潮（旧暦6月29日）

「おんばらい」は「御祓（みそぎ）」あるいは、「お祓い」という意味があるが、「鬼祓い」ともとれる。とにかく「厄を払う」ということには違いない。

もうかれこれ 20 年前までこの行事は行われていたらしいが、現在は白砂の浜がなくなり、いつも間にか途絶えている。白砂の浜があった当時、老若男女満潮時に海に入り、身を清め、家内安全・無病息災の祈願をしたらしい。

波越し

「比井之浜」8合目あたりに「波越し」といわれる所があり、貝の殻がある。島野浦の記録を見ると、今から130年前の安政元年に大地震と大津波があったので、おそらくその時ここまで海水が上がったのかも知れない。大きな地震の後、津波があるかどうかを古老にお聞きすると、「井戸水」を見るとわかるとのこと。土地の生活から生まれた古来の言い伝えとか…。科学の成果を信じることも大切かも知れないが、こうした生活から得た智恵も生かして欲しいものだ。

島野浦の文化を築いた人たち

「関月尼」の生涯 昭和8年「郷土展望」資料より

「関月尼」は、文政6年ころ大阪町奉行与力大塩平八郎の子としてその生を受ける。彼女（小山せき）は、生まれて間もなく生母に死別し、伯母に育てられるが、その間苦難・逆境に遭い、苦悶の末16～17歳位で尼僧生活に入る。没年は明治18年、63歳。

島野浦へは嘉永～安政の初めの36歳くらいの時期に渡島している。

彼女は遊芸の道に優れ、三味線・琴・鼓・舞・和歌等に特に秀でていた。雅号の「関月」の「関」は小山せきの「関」を、「月」は師匠：大田垣蓬月の「月」で、雅号と尼号をもらっているのである。彼女は、弘化の末から永嘉の始めに延岡に落ちてきたが、「恵等」という僧（容姿端麗・眉目秀麗）と一緒にいたようで、彼女が24～25歳、恵等が40歳位であった。島野浦へは最初恵等だけが渡り、福寿庵を開いている。関月はそれより12年遅れて、この地へ渡ってきている。

当時純粋無垢な島人たちは、天来にも似た異様な僧の姿に接し、驚異の目を見張った。恵等の渡島以前は、葬式・法要等の仏事はすべて須怒江の禅宗・普門寺に依頼し、永く檀家関係を結んでいた。

恵等が渡島してからは、仏事は彼に依頼するようになった。彼は、仏事の合間に島の子どもたちを集めて熱心に字や書を教えていた。それゆえ「庵」とはいいながら当時島唯一の寺子屋であったと伝えられている。彼は、仏学はもちろんのこと和漢の学に対しても造詣が深かったらしい。

「恵等」と「関月」が島の福寿庵にいたのは、10年位であったらしいが、その間恵等は法務のかたわら学問を教え、関月は縫針や遊芸を教え、島の子どもたちは、大きな声で歌い、踊り、彼女の監督で芝居をやり、盆踊りを踊った。

今島野浦で踊る「扇子おどり」は、彼女が仕舞から考えだし太鼓の音にあわせておどるように案出したものだと伝えられている。

今にしてみれば、「恵等」や「関月」は、島野浦における天来の文化の恩人というべきであろう。現在の福聚寺の裏山にあるハゼの木が、秋ともなれば美しく紅葉し、遠く海上から眺めることができるが、このハゼの木も恵等が植えたものとされている。ここ島野浦に、はるばる大阪から大塩平八郎の娘が来たことも何かの因縁であろう。儒学者であり、陽明学者である父平八郎は、飢餓救済の目的を達せずして敗死したが、娘関月もその父の意志をついでいたものだろうか。

ともあれ、島野浦に今なお息づく文化が、彼女たちから伝承されたことは確かなようである。

島野浦には現在（昭和58年当時）民謡・詩吟・尺八・舞踊・三味線・レクダンスなどのサークル活動がさかんに行われている。また島内の人たちは文字がきれいで、特に古老の人たちの毛筆のうまさには、ただ驚くばかりである。

文化の先達者「恵等」や「関月」をしのびながら

第13代島野浦中学校校長古川昌晴校長・磯部功一教頭 編集
「しまんだ～止むことのない時の流れの中に～」より

島野浦の主な年中行事

資料提供：長野 梧楼 氏

暦（期日）	行事とその内容
正月 元日	○朝早く若水をくみ、雑煮を作る。歯固めの餅を必ず一個ずつ食べる。 ○食事の時は、年寄りの膳で使った椎の箸を使う。
正月 2日	船の乗り始め。網元は年末に神棚に供えておいた。「かけの魚」（鯛か鱈を2匹そろえてお供えにしたもの）をおろし、釣り竿に結びつけ、海中に投げ込んで初釣りをする。かけの魚は、船中の祝いの膳に出して食べる。その膳には板がね餅（平らな形の餅）とその上にお金をそえて各人につけてある。 船中から陸に向かって餅・みかん・お金をまく。
4日	○仕事始めの畑の鍬入れをする。福入り粥を炊いて食べる。
13日	○田の鍬入れ。田に行って神酒とクワを供え、三クワ掘り起こしてその年の豊作を祝う。
29日	○島野浦の大火のあった日。白浜地区の人々は氏神様にお参りをし、深夜まで飲食をしながら神の御加護を祈り、感謝の意を示すおこもりであり、また一方ではお日待ちの行事のひとつでもある。だから、代表者は朝までいて、日の出を待っている。
2月 1日	○ナラビの朔日。正月に並ぶ日としてお祝いした。 ヒラを炊いたり、水モチで雑煮を作って食べたりする。
5月 5日	○端午の節句。チンポロモチという特別な餅を作った。男の節句なので、米の粉で男根の形の餅を作りそれをカヤで巻く。この時カヤの先のほうが鬼の手を広げた形になるようにしぼる。 この餅は男の子のいない家でも作った。チンポロモチをお供え用として10個くらい作り、床の間・大黒様・仏様などにお供えする。
7月13日	○精霊様は、真夜中過ぎにお帰りになる。その時までには燈籠を灯し、迎え火をたき、戸を開けて待っている。お帰りになり、仏壇に入られたら、お茶を一杯だけ供える。
7月14日	○朝、団子を供える。昼はそうめん・ワカメ・果物などを供え、夜は家族と同じ膳を作って供える。
7月16日	○朝早く精霊様がお帰りになる。お供え物はコモに包んで海に流す。この時浜では送り火をたき「また来年もきなさいね！」と言ってお供え物は流す。燈籠は、精霊様のお帰りの路が暗いということで、24日までともしておく。

8月 朔日	○主人が正装して、田をほめに行く。田の一枚一枚に「よくできました。よくできました。」といいながらほめてまわる。その後、手ごろな稲穂を刈り取って帰り、床の間にかけ干し、赤飯・神酒を供える。田ホメをする主人以外は「山に行くな。田に行くな。」といわれ、休日であった。そのころカメの子の生まれる時期でもあり、山に行くと山の神からカメコマレ(数えこまれ)て、帰れなくなるといわれた。帰れなくなるのは、カメは満潮に上陸し、満潮時に海へ帰るからとのこと。
10月 初亥の日	○亥の子。餅を一升五斗くらいつく。亥の子は百姓の神様。この餅は親戚や知己に配り、又亥の子ヅキに来た子ども達に与える。「亥の子ヅキ」は、子ども達が綱をつけた石を持ち歩き、田を作っている家の庭で「亥の子、亥の子、今夜の亥の子、餅つかん家は、鬼んめ、蛇んめ、角生えた子もて」と歌いながらそれをついた。家の人は、子ども達一人ひとりに2～3個の餅を与え、帰っていた。
11月 5日 氏神祭礼 秋祭り	○若い者は皆化粧をして参加。奥納屋・白浜・地下の部落から太鼓台に乗る人がそれぞれ2人ずつ出る。この人達はくじ引きで決められる。(かつては選考基準として、地区内に住んでいること。両親そろっていること。この一年の間に親戚を含め不幸がなかった家。などの条件があったといわれている) 太鼓台に乗る人は、白衣・青いたすき・桃色の鉢巻き・タビはだしで太鼓台にしっかりとくくりつけられ、振り落とされる危険を防いでいた。 大きな旋網船に積まれた、御神輿と太鼓台は船一杯暴れ回る。やがて当番の部落に上陸するが、そこでも御輿と太鼓台は激突をくり返し、島内は一日中にぎわった。 ※平成24年現在、船に御輿が積み込まれることはなく、主に島内の道路を練り歩き、神社前にて御輿と太鼓台が、無病息災を祈願して数度ぶつかり合うスタイルになっている。また太鼓台には、4人の小学校4年生の男子児童が化粧をして乗っており、御輿が練り歩き最後に神社に奉納されるまで鎮座している。
12月26日 ～27日	○年末になると、網元が船子へ「年取りんもん」といって、白米二斗を貸し与えた。(これはその後の漁獲配分から少し差し引かれ、一年間でかりた分を返済していった。)餅は普通1～2俵つき、鏡餅、イタガタメ(平餅)、ハマモチ(お年玉用)などに作られ、タタミをあげ座敷一杯に筵(むしろ)を広げ、藁(わら)を敷きその上に餅を広げておいた。29日は「苦の餅」として嫌い、餅はつかなかった。
12月31日 大晦日	○年のヨサ・・・正月の飾りは、満潮の時に行い、ウラジロ・ユズリハ・トビの紙包み(米・昆布・鯉節を包み込んだもの)を作って飾りつけをする。 しめ綱は外から1・5・3本のたれを出す。 網元の家では「かけの魚」(鯛・鰯)を2匹そろえて供える。 年取の膳の箸は、椎の箸を使う。
島の神社・仏閣	☆福聚寺(曹洞宗) 本尊：釈迦如来 延寶8年 長野助右衛門により建立 ★島野浦神社 (合祀社：愛宕神社、塩釜神社) 祭神：綿津見命外五神 正寶庚申年創建

島野浦三十三番霊場について!

1830年に西国33ヶ所を模して島野浦霊場が造られたと言われている。

遠見場山を中心に島野浦の山の尾根伝いに歩くと33の観音様と5つのお地藏さんが建立されている。それには、それぞれ本尊のあるお寺と寄進者の名前が刻まれている。

島野浦霊場にある観音様

☆観世音菩薩（救世菩薩）・・・^{せんじゆ}千手、^{じゅういちめん}十一面、^{ふくう}不空、^{ばとう}馬頭、^{じょいりく}如意輪、^{すゐ}准胝 等

大慈大悲で衆生を救済することを本願とする菩薩。衆生の救いを求める声を聞くと直ちに救済する現世利益のあらたかな菩薩。

1 ^{せんじゆ}千手観世音（千手千眼観自在菩薩）

千本の手を持ち、その手にそれぞれ一眼を持つ観音様。衆生の苦しみを千の慈眼、千の慈手で救う、大慈悲のはたらきのある観音様で観音様の王と称せられる。

○信仰すると延命・滅罪・男女和合の利益がある。

2 ^{じょいりく}如意輪観世音

手に持つ宝輪を意の如く転じて、一切衆生の祈願を成就させる観音様。

○信仰すると繁栄を与えてくれると言われている。

※衆生とは、救済の対象となる一切の生物のこと。

3 十一面観世音

頭上に十一の顔面を有する観音（慈悲の相、怒りの相、きばをむき出しにした相、暴悪大笑の相、仏面）救いを求める人を見逃さないため、あらゆる方向に目を配っている形をしている。

・信仰すると、除病、滅罪、求福の願いを成就してくれる。

4 ^{ふくうけんじゆ}不空観世音（不空縑索観音）

網と釣り糸を持ち、衆生を救い、諸願を成就してくれる。

・信仰すると、生死の苦海に浮沈する人、天を救うと言われている。

5 ^{すゐ}准胝観世音

・信仰すると、除災、延命、求児、除病などの願いを成就してくれるという。

6 一印観世音

第十番目の観世音にこの文字が刻まれていたが、文献等でそのような観世音を探すことができなかった。 ※どなたかわかれば調べて欲しい。

7 馬頭観世音

馬頭は転輪王の宝馬が四方の敵を駆逐するように一切の魔を打ち砕く力をあらわす。

- ・信仰すると馬の除病，息災の守護があると言われている。（畜生道の教主とも言われている。）

8 聖しょう観世音

一般に「観音様」と言われている観音。

☆地蔵菩薩

地蔵菩薩は，釈尊の入滅後弥勒菩薩がこの世に出現するまでの間，衆生を救済するために付嘱された菩薩。

- ・信仰すると六道（地獄，餓鬼，畜生，修羅，人間，天）の衆生を救済する。

1 子安地蔵 …………… 妊婦の安産を守護する地蔵。

2 六地蔵 …………… 六道（地獄道，餓鬼道，畜生道，修羅道，人間道，天道）の苦患を救う地蔵。

3 延命地蔵 …………… 新しく生まれた子を守り，短命の難を逃れる。

4 勝軍地蔵 …………… 軍神として尊信される地蔵。

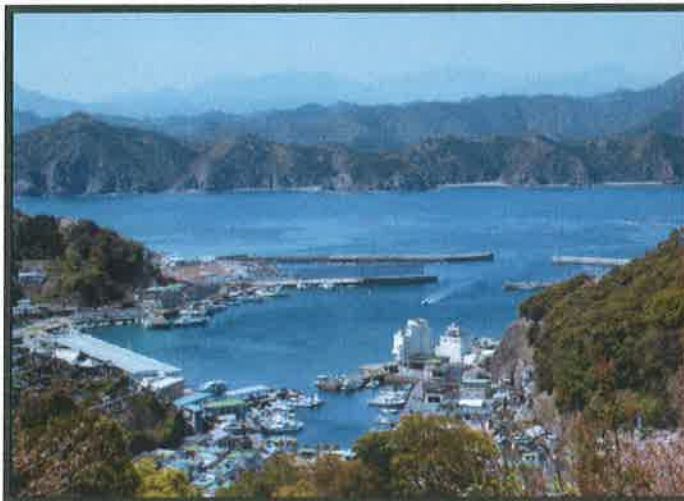
◎地蔵菩薩の十福 …… 地蔵信仰の十の福德のこと。

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 1 ㊦ 女人泰産 | 2 ㊦ 身根具足 | 3 ㊦ 除衆病疾 | 4 ㊦ 寿命長延 | 5 ㊦ 聰明智恵 |
| 6 ㊦ 財宝盈溢 | 7 ㊦ 衆人敬愛 | 8 ㊦ 穀米成熟 | 9 ㊦ 神明加護 | 10 ㊦ 証大菩提 |

☆みろく菩薩

釈尊の後継者とされている未来仏の菩薩。

釈迦死後 56 億 7000 万年後に現世に出現し，衆生を救済すると言われる。



しまんだ(島野浦) の特徴的な方言

	方言	標準語		方言	標準語
固有 名詞	みやんだ	宮野浦	副 詞	ちゃん	兄さん
	すね	須美江(須見江)		しょしゃもん	だらしのない人
	くまね	熊野江		…やん	……さん
	じゃこ	アジ		ぎゃったん	非常に 大量に
	はんさこ	イサキ		ぼくしょね	非常に
	くえ	アラ		だいしょ	少し
	ぐれ	メジナ		ことぶつつ	たくさん
	まんびき	シイラ		さっち	どうしても
	よたれ	カタクチイワシ		じき	すぐに
	ごちょう	カサゴ		とおんの(とんか)	ほんとね
普通 名詞	やま	ひも(紐)	動 詞	めつる	のぼせ上がる
	めんたたき	ばちんこ(めんこ)		ほっしょけ	ほおっておけ
	せ(さい)	おかず		うどめ	速く走れ
	てんご	冗談		うどまかす	やっつける
	おおどもん	横着者		まえ	走れ
	ちゅうらくまん	おせっかい者		うだく	抱く
	よめ	好かん奴		よこう	休む
	めしつぎ	おひつ		ばる	(小便を) ……をする。
	へご	ばか		くじくる	だだをこねる
	がさ	できもの		ちっとらかやす	たたく
	かざ	におい		とっぱかやす	暴れ回る
	えいや	舟(幼児言葉)		うっとらかやす	ひっぱたく
	つじ	唾		あれぶっち	強がる・荒ぶる
	いよ	魚		えーいかん	行けない
と	瘡蓋	つんじくる	つねる		
代 名詞	おっだん	おれ達	くい	こい(命令形)	
	わり(わい)	おまえ	どぶる	白をつく	
	だり	だれ	すむ	水にもぐる	
	めんめ	自分	しょみこむ	熱中して止まらなくなる	
	にゃんにゃん	お姉さん	やるしょわね	絶対にやらない	
	ほ(お)ばい	友達(朋輩)	もぐる	やぶをくくる	
			かやす	言う	
		座る	(舟)が座礁する		

	方言	標準語		方言	標準語
形容詞（便宜的に入れてあるものもあり）	えらしい	かわいらしい	その他	なんの	なんじゃ
	どんぶなこつ	存分に		おっじゃ・おりじゃ	おれだ
	むじよなこつ	かわいい		…しゃんしたの	…したの
	さがしゆなる	元気になる（子どもが生まれる）		うまらしゅう	うまく
	うんてえー	重たい		わりもんのー	悪いものな（ね）
	きびたんがいい	気味がいい		もういったばい	もう行ったよ
	まてえ	弱い		しちよんのばい	…したのですよ
	ほぜくりあがる	ほーっとなる（わからんようになる）		ふれ	古江（地名）
	やけた	顔が赤くなる		ぐえ	具合
	ひやきい	つめたい		どぶる	嘘をつく
	むしんね（なや）	はずかしい		…せんづき	…（も）せんで
	かしきい	賢い		ふつつる	捨てる
	かしきぼ。かしき。	こすい・ずるい		かちちよる	知っている
	だいばん	大きい		はよがんす	おはようございます
	せせまかし	せかせかした		おしまいでがんす	こんばんは
	せせろっしゃ	厚かましい		こきびたん	小気味いい
	早さまあ	早いこと		やちちやる	たたく
	しゅうしね	出しゃぼり		語尾の「の」	わりもんの・さみもんの・ほんとの
	はげらしい	はがゆい		語尾の「や」	おずや・ながや・こわや
	さたけなや	ひょうきんな			
	うまらしい	うまい。うまくいった			
	むげね。むげなや。	かわいそうな			
	おろい	貧弱な			
	わらいった	うまくいった			
	なきいった	こまった			
ちょこばい	くすぐったい				
ふを見い	様子を見よ				
その他	行こおる	行きつつある			
	いんじよる	帰っている			
	いんてえ	帰りたい			
	ぎゃったんなもんじゃと	大変なものだそうだ			
	行くのん	行くのだ			

しまったで語られている民俗知識 (ことわざ・教訓)

(代表的なものを抜粋)

項目	その内容
教育関連	<ul style="list-style-type: none"> ・万町畑の垣はできても、一人娘の垣はできぬ。 ・おとなしい者が、くさい屁をひる。 ・嫁をもらわば、親をもらえ。 ・火は8人とき。 ・こつて牛は死んでも前田荒らさぬ。 ・山を見てカジを取れ、人を見て法をとけ。 ・西の風と夫婦げんかは夜になると風ぐ。 ・六船頭。(船が山に登る) ・親の意見とナスビの花は、千に一つのあだもない。 ・茶碗を叩くと地獄の釜の底まで聞こえる。 ・親腹三日。(親の恩を知らない) ・秋ナスは嫁に食わずな。 ・ほうぼうの頭は嫁に食わせ。 ・千尋の網に一寸のキズ。 ・遊んでいては「ナベはたぎらん」
兆占関連	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当のおかずには四つ足・梅干しを持っていくな。 ・より月のある年は、仏具を買うな。 ・船の上で口笛を吹くな。 ・出漁の時に酔を持っていくな。 ・死人が出たら、1週間出漁はしない。 ・葬式の使いは1人で行くな。 ・妊婦が竈(かまど)を修理すると鬼口の子を産む。 ・流行病がはやったら、玄関に八つ手をささげるか、にんにくをかける。 ・月が連れ星をすると人が死ぬ。 <ul style="list-style-type: none"> ・鼻血が出たら、ドンのクビの毛を抜くか、ドンのクビをたたく。 ・目にゴミが入ったら、舌を鼻の方に動かす。 ・脚気は朝露をふめ。 ・イボの血をつけるとイボが増える。 ・夜泣きする子は、雄どりの絵を描いて逆さに吊せ。 ・病人が絶えない時は、ビワの木を切れ。

しまんだの料理！

料理名	調理法
茶漬け	<ul style="list-style-type: none"> ● タイ・ブリ等の新しい魚をさしみよりやや小さめに切り、砂糖と酒少量の中に30分位つけ込む。汁が魚にしみこんだころ醤油にて味付けをする。それにごま・ねぎ等を加え、風味を出す。 熱いごはんにかけていただく。(お祝いの座のご馳走)
たたきこ (たたっこ)	<ul style="list-style-type: none"> ● 魚を三枚におろし、小骨を取り、まな板の上で小さくなるまで包丁でたたく。それにお味噌をたたきこんで味付けをする。生姜・ねぎ・唐辛子・ごま等を加え風味を出す。 ● そのまま食べたり、さしみにつけて食べたり、うすくのぼして鉄板で焼いて食べたりする。また、鍋に入れても美味しい。
あげみ (てんぷら)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大きい魚は三枚におろし、小骨をとり、ミンチにかける(できれば2～3回)、それをすり鉢にとり砂糖・小麦粉・卵・水・タンサンを加え、よくすりこむ。最後に塩・うすくち醤油にて味付けし、成形して油であげる。 ● 魚種によって味が違うので、いろいろな魚を使ってみることも楽しい。冷凍しておくとかかり保存がきく。
さつま	<ul style="list-style-type: none"> ● アジ・カマス・イサキなどを素焼きにし、身をほぐし、すり鉢ですりつぶす。更に、砂糖・みそ・水を加えてすりこむ。しその葉・ごま・ねぎ等を加えて風味を出す。 ● ご飯にかけていただく。特に麦ご飯にかけて食べるとおいしい。

※ 参考 … 刺身を食べる際にわさびを使わずに、赤唐辛子を火であぶり、パラパラにしたものを刺身醤油に混ぜて食べることを好む方も多い。

しまんだの民謡

十七よ 十七よ

われに言うことかずかずござる
明日は吉日 嫁入りさすぞえ
他人の家に住家すりゃ
原の立つこと 日に三度ある
それを苦にせず 朝はとう
朝はとうから 髪かたちして
茶の間みがいて 朝茶を入れ
向こうの男をおはらいさんじゃと
たてまつれ
世帯片手に ずいぶんしまつ
他人相手に人ごと言うな
かべに耳あり 柱に眼びく
親の名のたつ世界ぞや
ソレ、しょんがあえ
— よいこの節より —



島野浦神社の由来

かつお船賛歌 (第1部)

- 廻り三里の 島なれど
県北誇る 島野浦
数多漁船の ある中で
わが乗る船は 蛭子丸
- 春も三月 桜どき
花咲く季節と なるなれば
さして行きます 七島灘
山川基地へと 急ぎます
- 島を出るとき 手を振って
送ってくれた 友あれど
涙にぬれた 顔あげて
送ったあの娘の 可愛さよ
- 宮崎平野を 右に見て
音にきこえし 赤江灘
ほゆる荒波 両舷に
分けつつあぐる 灘お神酒
- 青島沖を 通過して
右舷に近し 鵜戸神宮
しばし機関を 停止して
無事な航海 祈ります
- やがて着いたる 県南の
漁船たむろす 良港は
わが島野浦と名を競う
県下に誇る 油津港
- 一夜の夢を 油津に
結んでさらに 南進す
都井の岬に 牧水の
“日向国都井の岬の青潮の入り来る端に一人海見る”
歌をしのんで口ずさむ
- 有明湾を 過ぎ行けば
早 鹿児島は 大隅の
先端近くさしかかりや
さい立ちさわぐ 佐多岬
- 鹿児島湾を 北上し
行くて左舷が あこがれの
一年前の 思い出の
更になつかし 山川港
- 山川港に 着くなれば
マスト連ねし 大型の
同業船は 数あれど
出会う人なき 寂しさよ

かつお船賛歌(第2部) — 長野 島市 作 —

- 11 出港準備も 早終えて
明日の船出を 待つ夜の
夢は果てない 紺ぺきの
トカラの海を かけめぐる
- 12 開聞岳が 背伸びして
出船見送る 薩摩潟
エサのいわしも 元気よく
活間に泳ぐ 朝ぼらけ
- 13 鬼界ヶ島と おそれられ
流人運びし 硫黄島
治承の昔を 今にして
乗せてやりたや 俊寛を
- 14 朝南風せわし 海原に
突如舞い立つ 幾百尾
しづくして飛ぶ 飛魚の
ヒレに輝く 朝の陽が
- 15 鳥山群れた 大魚群
鯨に着いた 小魚群
え付悪けりゃ ただの群
今日も獲物は なかの島
- 16 日暮れてかかる 島陰に
ひと日の汗を 流し終え
タバコ一服 スワンセの
煙が降らす 灰の雨
- 17 台風情報 キャッチして
へさきめぐらす 悪石島
避難する間も あればこそ
たちまちおそう 大あらし
- 18 竜人くるう 夜の海
奈落の底に 沈む船
サラ(新品)に 着替えし 肌着こそ
海の男の 死衣装
- 19 黒潮分けて 昇る陽に
あわて飛び立つ かもめむれ
一夜の嵐は まぼろしか
夢かうつつか 今朝の空
- 20 眠れぬ夜の 宝島
ふけてデッキに たたずめば
船ばたたたく 波の音
海賊キッドの 声を聞く
- 21 仕合せ悪けりゃ 屈もくさい
シケも不漁も ふきとばす
意気と希望を かけて飲む
今日の御神酒は まん直し
- 22 空にむれ飛ぶ かつお鳥
海に水する 大魚群
まわせエンジン 全速で
めざす魚群に 乗り入れよ
- 23 ばらまくえさを 食む渦に
海面白く たざり立つ
輝く南の 青空に
虹生みいだす 散水器
- 24 うなる角竿 降るかつお
夢見て待ちし 時は今
生みの男が 六万踏む
ひのき舞台の 花道ぞ
- 25 山なすかつおの 処理終えて
進路北さす 羅針盤
大漁おみきの 景気よい
歌声ひびく 夜の海
- 26 臥蛇の燈台 ひがつけば
航跡そむる 夜光虫
今宵デッキに 立つ風は
帆に受け急ぐ 山川港
- 27 獲物に重き 帰り船
心は軽き 帰り船
雲に顔出す 屋久島や
海にねそべる 種子島
- 28 長崎鼻の 出迎えを
受けりゃ程なく 山川港
土産は船艙 山をなす
大ばんかつお 五千貫

鳥浦益音頭(一部)

さいの川原

さて世の中の定めがたきは無常のあらし
散りて先だつ ならいといえど
わけて哀れは 冥土としやばよ
さいの川原に とどめさす
二ツや三ツや四ツや五ツ 十よりうちの
幼子が朝の日の出に手を取りかわす
鳥も通わぬ 野原に行きて
土を運んで 登りつ下る
山で大将は 我一人どや
いうもありまた かたほとりにて
石で運んで 十ツツならべ
一重積んでは 父上のため
父のご恩と申せしは しゅみせんよりも
高くして 言葉になんとのべがたいどや
二重積んでは 母上のため
母のご恩と申せしは ソウ海よりもまだ
深いどや
三重積んでは郷里、兄弟、我が
身のためよ 幼な心に 涙に笑顔
昼は仲良く 遊びはすれど
日暮れもとには ものさびしさに
父をたずぬる うば恋し
なく声こだまに ひびきつつ
あら不思議や積み重なりて
小石たちまち あくき(悪鬼)となりて
やく(厄)のとうば(塔婆)も
積むともせいで いずこともなくうせにけり

かかる嘆きの そのをりふしに
地藏菩薩が現れ出でて
何を泣くぞえ 子供よ子ども
ここに来いよと 髪かきなでて
顔をさすりて 衣のそでで
かざし給えば皆とりついて
共に涙の 御ひまよりも
すかしなだむるお言葉顔で
我にあずけて どしやばに行く
帰りを待つや待たずして
罪は我人あるあるならいじゃが
とかく世上の ならいといえど
わけて哀れは 冥土としやばよ
賽の川原に 迷い来る



大和三太

島の始まり 淡路が島よ
国の始まり 大和の国と
大和の国では 山崎三太
じたい三太が 生まれを聞けば
父は朝日を名乗りし長者
母は京都の おないりうちに
家の系図も れきれきなるが
なれど朝日に 子のない故に
ここに関東下野の国日光さんと
きせいをかけて
もうしおろした三太であれば
器量吉野の 桜木育ち
なれど三太は哀れなものよ
幼きときより 父上はなれ
母は一人 はぐくみかねて
母がならねば 酒井屋さんに
小判四拾両で 身を売りはなつ
親のためなら 苦しうはないと
寒の師走も 日に六月も
さえた月夜も 又やみの夜も
こまの手綱で 月日を送る
明日は伏見のだ賃屋さんの
京につけ出す だ賃の荷物
麻が七丸 煙草が八丸
越後さらしが 三十と五反
朝の七ツに 荷をふせそろえ
数多朋輩 打ち連れ立ちて
京と伏見は三里の通り
三里道をば 歌でやる
歌でやらねばひょうしやると
じたい三太は 馬子歌じょうず
山で歌えば 木かやがなびく

川で歌えば 鳴瀬もとまる
滝から落ちる水でさえ
宙にとまりて きくよな歌よ
道の小草が しなりとなびく
坂はてるてる 鈴かは曇る
あいの土山雨となる
伏見町をば 歌うて通る
伏見町なる 大官様の
一人娘に 玉世の姫と
年は十九で きれいな生まれ
顔はぼたんで 姿がやなぎ
顔のぼたんに 朝日を受けて
朝日かがやく 玉世の姫は
しょくにもたれて格子のうちで
書きっ読んずの 学問なさる
前を三太が 歌うて通る
奥の姫君 おんききなさる
とてもきれいな馬子うたなるが
どこのいづこの 人かは知らぬ
声のよいほど 器量もよかる
器量よければ 姿もよかる
あれが大和の 三太であろう
一目見たいは 大和の三太
なれど家柄 武士の子なれば
門に走り出 聞くことならぬ
格子の内てただきくばかり
三太馬子うた 早恋となる
恋がつもりて 病となれば
医者よ医者よと 騒動なさる
伏見町なるお 医者をもよんで
医者のみたてで 薬はもれど
病気なかなか なおらない

(以下つづく)

八百屋お七

野辺のすすきは あらせにもまれ
人の器量は 恋路にまよう
八百屋お七と 浪花の梅は
ひらきかけたる その数々に
吉三さんにと 送りし文を
便りよしみで つい打ちあけて

心もとけて 下ひもといて
寝た夜は なぎさの舟よ
加持も祈祷も ただ寝ぬ浮世
まれなちぎりの その定めには

二世も三世も変わらじと ちかいし筆や
夢の情けでお七は寺に
えこうたのむと 腰うつむいて
しばし涙と 軒端の梅は
枝を離れて 野つつじ咲く
恋しいゆかしい その一筆が

一ツとさはのノーエ
人目もせきにせかれつつ
こがるるこの身がのを知らせたや

二ツとさはのノーエ
二人寝る夜があるなれば
そのうれしさはいかばかりじゃと

たれが教えて ひとつのわらに
思いつきしは この世の名残
妻はこの世の ありあけ桜

君は君故 火桜の
燃ゆる思いは未来のちぎり
煙の中にも 君の声が
暮れに蚊のなく 如くなり

そこでお七が 帰ろとすれば
吉三名残の 顔をもあげて
一足おくれて帰らずば
六日のさわに咲く田のしょうぶ

桐に鳳凰 それ松に鷹
鹿に紅葉は えいがのなどよ
八百屋お七が それ色ばなし
親子三人 たんなじ寺に
借家住まいが 恋路となりて
寺の小しょうの吉三郎と
深くかわせし 初恋なるが
すでに本郷も家成就して

お七は本郷に帰りなば
色はほほに出て 姿はやつれ
寝ざめ寝ざめに ただつくづくと
鐘のなるのを 指折り数え
十ついたで 遠のくなれば

九ツえ九ツすぐれば八つの鐘
胸にひびくや せきくる涙
八ツえ八ツついたで 山坂こえて
通う恋路のならない
七ツついたで 名残がまさる
六ツついたで 胸にとせまる

五つ一度に 思案を定め

もう一度我が家を焼いたなら
寺の吉三さんに あえようものを

上衣の小袖に火をかくし
だれ知るまいと 思うたに
かま屋の武平治にみつけれしは
無念やお七
だいらしらすに引き出される

時の役人 お七が伯父よ
罪のひらきを いたさんものと

お七は十四であろうがの
いえいえ私は十五でござる

それを聞くより その役人は
胸に涙のたまりしさまよ

めでたいな めでたいな
めでたい鯛釣る かつを釣る
いわしは網でひくものよ
浜には小判を しきならべ
銭金倉や網倉を
立てならべたる その中に
七福神がましまさる
村方繁盛 網繁盛
お家繁盛と舞をまう



白 滝

島のはじまり 淡路が島よ
国のはじまり 大和の国よ
神のはじまり 鹿島の神よ
縁を結ぶは 出雲の神よ

縁は甚だ 定なき

父はよこはぎ 豊成公よ
姉は田島の ちゅうじょう妃よ
妹白滝 二八の姿
一のきさきに そなはり給う
摂州津の国 山田が里に
伊左右衛門とて かしこき男子
だいらしらすの 部にとられ来て
塵を拾うて つとめていたが
みすの恋風 吹きまくりきて
一のきさきの 白滝様の
つぼみまる寝の おん寝姿を
ちらと見るより 早恋となる
恋が積もりて 病となれば
最早つとめに 出られもせず
彼方こなたに 漏れきこえては
ついに御官の おん耳に入る
伊左右衛門をば そばにと呼んで
神はこれ程 あわれみ給う
なんじ恋する その優しさは
恋は日本 唐・タイとまで
高い低いの 隔てはないが
一層連れそう 歌詠むなれば
願いかなえて 得させんものと

そこで男子と 白滝様の
両方互いのおん知恵比べ
一のきさきの 白滝様の
お読みなされし 那ご名歌は

「雲谷の濁らぬ水の白滝に
心かけなよ山田男子」

と読みあそばさる
それを男子が まずとりあげて
お日はてるてる山田は枯れる
「水無月の山田も露にこがれ来て
山田におちよ白滝の水」

と読みあげければ
上をはじめの 公家大臣は
やんやあつぱれ おん名歌じゃと
みすも とちょうも
ただめきければ
家の系図も かの巻紙も
守り刀や むこさしでもの
いとし恋しの 白滝様も
伊佐が女房と 名を改めて
あすは帰るど 山田が里へ
山田八丁 召し下される

連れて帰るよ
山田が里へ

あわの鳴戸

ここに哀れは 巡礼くどき
国はどこよと たずねて聞けば
四国あ州の徳島町よ
主人忠義の 侍なるが
お家大事の 刀のせんぎ
なんの因果か 無実のなんぎ
国を立ちのく 夫婦の願い
神や仏にや 心願かけて
さずけ給えや あの国次を
三つになる子を 我が家に残し
出でて行くのは 大阪さして
音に名高い 玉造りにて
九尺二間の 借家をいたし
そこやかしこに たずねんものと
刀商売 とぎ屋の店も
心静かに 目利きをなさる
後で哀れは 婆さんと娘
最早七年 婆さん育ち
子どもながらも はつめりなもの
親のゆくえを たずねんものと
育てられたる あの婆さんに
永のいとまを 度々願う
もうし婆さん あれ見やしゃんせ
隣近所の子どものように
髪を結うたり 抱かれてみたり
それが私は
うらやましようて
今日は是非なく おいとま申す
四国西国 巡礼すがた
せないおいづる 六社の名簿

娘おつると 書いたる文字の
すみはねずみで 姿がうすい
白のキャハンに 四つのわらじ
すげのおかさや 同行二人
大慈大悲の 観音様よ
どうぞ父さん あの母さんに
あわせ給えと 両手を合わせ
三十三番 残らずおがみ
出でて行くのが 哀れなことよ
あとで婆さん ただなくばかり
出でて行くのが 紀州をさして

札所一番 あのなち山
二番に紀の国紀見井寺
三番同じく 小川の寺よ
父と母との めぐみも深く
四番和泉の牧尾の寺よ
五番に河内の藤井寺
参るより頼みをかける
藤井寺花のうてなに紫の雲
読んで終わりにてその道すがら
行けば大阪 玉造りにて
門に立ちたる 巡礼娘
奉謝願うと 優しき声で
神のめぐみか 観音様の
お引き合わせか 前世の縁か
軒を並ぶる その家つづき
母のお弓は 我が子と知らず
奉謝しんじよと そばにと呼んで
盆にしらげの志 見れば愛らし

巡礼娘

あわの鳴戸 ～第2部～

国はいずこと たずねて聞けば
わしは紀州の 徳島町よ
そして父さん あの母さんと
同業三人 巡礼するか
言えはおつるは その親切に
わしは父さん 又母さんに
あいたさ見たさに 遠くの道を
一人西国 致しますが
きいてお弓は 早気にかかる
一人旅とは どうした訳か
訳は知らねど 三つの年に
わしを婆さんに あずけておいて
どこえ行くやら行方も知れず
そしてお前の 二親達の
お名は何じゃ 聞かしておくれ
わしが父さん 十郎兵衛というて
母はお弓と申しますが
きいてびっくりお弓が心
そばにすりより おつるが顔を
穴のあくほど つくづくながめ
覚えあるのが ひたいのほくろ
はっとびっくり 心をしずめ
ここで名乗れば 互いのなんぎ
どうかだまして 帰さんものと
年もとらぬに はるばるここに
たずね来たのに その親達が
さどや聞いたら うれしかろう
ままにならぬが 浮き世のならい
そなたのように
顔も所もしらない親を

もしもたずねて あわれぬ時は
なんのせんない ことではないか
さあさこれから 心をかえて
帰らしやんせや 婆さん方へ
父もおっつけ もどるであろう
言えば おつるは 涙を流し
わたしや恋しい あの二親に
たとえいつまで かつたなりと
どんな苦勞も いといはせねど
辛いことには 一人の旅は
どこの宿でも 泊めてもくれず
野に寝たり 山にも寝たり
人の軒端でうちたたかれる
ほんにくやしいことではあるが
わしが父さん 又母さんは
どこにどうして いやしんすやら
早うあいたい お顔が見たい
言えはお弓は なおせきあげて
我を忘れて 早抱きあげ
わつとばかりに 泣き沈む
母のお弓は名乗りもならず
共に涙に なきいる娘
わたしやお前が 母さんのよで
帰りともない いにともない
どんなことでも 致しますが
置いて下さい お前のそばに
言えはお弓は 涙にむせて
帰しともない やりともないど
思う心は 山々なれど

ここに置いては お為にならぬ
ここの道理をよくわきまえて
帰りしゃんせや 婆さん方へ
ぜひもなくな 帰ろとすれば
母のお弓は 我が針箱の
金子とり出し 娘にむかい
これは私が少しばかり
言えはおつるが 涙を流し
わたしゃ小判が たくさんござる
無理におしやり ちり打ちはらい
もうしおばさん おいとま申す
首にかけたる 鐘打ちならし
大悲大慈の 観音様よ
出でて行くのを あと見送りて
言うに言われず
ただ泣くばかり

しばしお弓は 心の思案
ここで別れて 又いつの世で
あわぬ親子の 身の上なれば
いつそなんぎが かかれば
かかれ
連れて帰りて 名乗らんものと
こずまかいとり
帯ひきしめて
道は親子の別れ道
あとをしとうて
はやたずね行く



平成 26 年 2 月 16 日「遠見場祭り」より



島野浦西国三十三ヶ所観音巡り

番号	所在地	寺院名	菩薩名	施主
1番	紀伊国 那智勝浦	青岸渡寺	如意輪観世音	白浜若中
2番	紀伊国 和歌山市	紀三井寺	十一面観世音	十五郎組組中
3番	紀伊国 紀の川市	粉河寺	千手千眼観世音	黒木 萬屋
4番	和泉国 和泉市	施福寺	十一面千手千眼観世音	岩谷傳右衛門・塩谷傳七 傳兵衛
5番	河内国 藤井寺市	葛井寺	十一面千手千眼観世音	
6番	大和国 高取町	壺坂寺	十一面千手千眼観世音	○桐 嘉兵衛
7番	大和国 明日香村	岡寺	如意輪観世音	木津 幾平
8番	大和国 桜井市	長谷寺	十一面観世音	関屋 治郎衛門
9番	大和国 奈良市	興福寺南円堂	不空 ^{けんじょう} 絹索観世音	新作組組長
10番	山城国 宇治市	三宝戸寺	千手観世音	讃岐○○五郎
11番	山城国 京都市	上醍醐准胝寺	准胝観世音	地下・奥納屋若連中
12番	近江国 大津市	岩間寺	千手観世音	清田清右衛門
13番	近江国 大津市	石山寺	如意輪観音像	嘉三治組組中
14番	近江国 大津市	三井寺	如意輪観世音	富田嘉三治・新屋萬平
15番	山城国 京都市	今熊野観音寺	十一面観世音	
16番	山城国 京都市	清水寺	十一面千手千眼観世音	松尾中兵衛
17番	山城国 京都市	六波羅蜜寺	十一面観世音	城野玄南正明・若屋忠右衛門・ 谷内屋新右衛門
18番	山城国 京都市	頂法寺六角堂	如意輪観世音	藤平組組中
19番	山城国 京都市	行願寺草堂	千手観世音	伊豫弥兵衛・久平
20番	山城国 京都市	善峯寺	千手観世音	音右衛門組組中
21番	山城国 亀岡市	穴太寺	聖観世音	高○○大○○・磨朝○○○○
22番	攝津国 茨木市	総持寺	千手観音像	米屋惣左衛門
23番	攝津国 箕面市	勝尾寺	十一面千手千眼観世音	佐藤仁左衛門
24番	攝津国 宝塚市	中山寺	十一面観世音	源兵衛組組中
25番	播磨国 加東市	清水寺	十一面千手観世音	長野助之丞
26番	播磨国 加西市	法華山一乗寺	聖観世音	升屋久四郎
27番	播磨国 姫路市	書寫山圓教寺	六臂如意輪観音像	佐藤久兵衛
28番	丹後国 宮津市	成相寺	聖観世音	魚屋彦右衛門
29番	丹後国 舞鶴市	松尾寺	馬頭観世音	南町：松山万兵衛
30番	近江国 長浜市	宝巖寺	千手千眼観世音	
31番	近江国 大津市	長命寺	千手十一面観世音	八十右衛門組中
32番	近江国 大津市	観音寺	千手千眼観世音	播磨屋 角十郎
33番	美濃国 揖斐川町	谷汲山華嚴寺	十一面観世音	長野助左右衛門卓○

島野浦の屋号（民家に伝わるもの）

平成26年 3月現在

島野浦には昔から伝わる屋号を持つ民家が多い。特徴としては、島外の日本各地との交易をしていた商家の名残を思わせるものや自営業としての島内での商売の名残、事業として漁業の網元として船の名前の称号や加工場の称号（ロゴ・マーク的なもの・ファンネルマーク）としているものなど、様々な特徴的な屋号や称号が見られる。ここでは、まず島野浦の民家でその家に代々伝わってきた屋号をわかる範囲で挙げてみた。また後のページには、事業内容からの商標・ロゴ的な紋章などを調べてわかった範囲で紹介していきたい。（※比較的大きな事業所が中心になっています。）

NO	屋号／呼称	呼び名	現 世帯主	備 考（地区・他）
1	讃岐屋	さぬきや	清池 毅	白浜東
2	備前屋	びぜんや	木田 章乃	地下
3	大阪屋	おおさかや	山下 鶴彦	地下
4	久兵衛屋	きゅうべや	佐藤 富士幸	白浜東 製造業
5	銀兵衛屋	ぎんべや	中田 銀太郎	白浜東 養殖業（ハマチ）
6	関屋	せきや	故：松尾 円一郎	奥納屋（宇和さんの隣）
7	播磨屋/格納屋	はりまや	長野 格平	白浜西：トンネル入り口
8	榭屋（幾伸丸）	ますや	佐藤 元久	白浜東（佐藤仁一さん父）
9	彦よみ/魚屋	ひこよみ	長野 俊	白浜東 製造業
10	幾よみ	いくよみ	木津 亀次	地下 製造業
11	中屋	なかや	中島忠次郎の娘夫婦	白浜東
12	勘場（カネイ）	かんば	松山 智行	白浜西
13	穴屋	あなや	小野 島一	白浜東 ※小野厚紀さんの父
14	花屋	はなや	城野 保忠	奥納屋
15	樽屋	たるや	高田 福重	奥納屋（高田新二さん父）元桶造り
16	傳バ	でんぱ	平賀（転出）	奥納屋 [和歌山より]
17	萬バ	まんぱ	中田 実	白浜東
18	うらしま屋	うらしまや	清田 徳男	地下
19	重五郎屋	じゅうごろうや	岡田（転出）	地下
20	南浦丸	みなみうらまる	小野 文紀	宇津木 現小野鉄工

21	南島丸	なんとうまる	岡田 七夫	地下 (結城商店裏)
22	銭湯屋	せんとや	富田 ?	奥納屋 加工業
23	風呂屋	わかや	岡田 賢一	奥納屋
24	宿屋	やどや	伊藤 泰男	奥納屋 元加工関連
25	通い船	かよいせん	谷平 宗利	地下 谷宗水産
26	青物屋	あおもんや	高木 定 (転出)	熊野江 高木水産
27	幸吉	こうよし	長野 哲幸	白浜東
28	ゴンドウ	ごんど	畦原 博茂	奥納屋 浦島屋の裏
29	重太	じゅうた	岡田 (長野和代)	奥納屋
30	嘉三治	かそんじ	富田 穰	奥納屋 藤丸という運搬船
31	敬太	けいた	柴 敬雄	地下
32	新平	しんぺ	三島 未治	奥納屋
33	萬徳	まんとく	宇和田 重徳	地下 しび縄船
34	今保	いまほ	今原 賢慈	白浜西 加工 今原 保三郎さん
35	八十七	やそひち	清池 傳次	白浜東
36	八重ソ	やえそ	長野 喬 (転出)	白浜東
37	浮世	うきよ	(転出)	? (芸者屋) ?
38	向	むかえ	畦原 明文	奥納屋
39	西の上	にしの上	畦原 安志	宇津木
40	米屋	こめや	畦原昌二郎	奥納屋 畦玉 (加工)
41	下駄屋	げたや	長野 忠蔵	奥納屋
42	角一	かくいち	佐藤直ひろ	白浜東
43	角吉	かくきち	池田 種友	白浜西 小釣り船
44	畦伊	うねい	畦原 次守	宇津木 加工
45	芋納屋	いもなや	松山でんじろう→松山たかえい	白浜東
46	地藏屋	じぞうや	木原家	白浜東
47	角屋	かどや	松田家	?
48	飴屋	あめや	(富田) ?	奥納屋

島野浦の屋号（主な事業所関連） ※これら以外の事業所もあり

ここからは、島内での漁業に関わる主な伝統的な事業所を紹介していきたい。はじめに島で伝統的な旋網漁を行う事業所（網元），次に旋網船で獲った魚を中心に加工する加工場，養殖漁業に関わる事業所，伝統的な大敷網（定置網）による事業所などを紹介していきたい。※（全てではありません。）

NO	屋号／呼称	ロゴマーク (ファンネルマーク)	事業主	備考
1	旋網船 徳信丸		西口 政憲 (白浜西)	ヤマニシ
2	旋網船 事平丸		森本 徳喜 (白浜東)	ヤマタ
3	旋網船 大黒丸		松田ひろし (白浜東)	マルツ
4	旋網船 春日丸		清田幸一郎 (奥納屋)	☆読み方は不明 ファンネルマークの由来 は、諸説有り！ その1：春日の局の紋をモ チーフにしてある…らし い説。 その2：延岡藩主内藤家 から下賜されたとする説 等。
5	旋網船 鶴島丸		中島 耕成 (地下)	カネナカ
6	今原水産 (加工)		今原 賢慈 (白浜西)	ヤマキ (今原保三郎さん) 通称：イマホ

NO	屋号／呼称	ロゴマーク	事業主	備考
7	城野水産 (加工)		城野 保忠 (奥納屋)	カネハナ
8	阿部水産 (加工)		阿部 初男 (白浜東)	ヤマサン
9	谷宗水産 (加工)		谷平 宗利 (地下)	ヤマソウ
10	宇和田水産 (加工)		宇和田 嘉範 (白浜東)	ヤマミツ
11	西口水産 (加工)		西口 政満 (宇津木)	ヤマト
12	丸宗水産 (加工)		畦原 安志 (地下)	マルソウ

NO	屋号／呼称	ロゴマーク	事業主	備考
19	松山水産 (加工)	利	松山 博行 (白浜西)	カネイ
20	山田水産 (加工)	万	社長：山田陽一 (佐伯本社) 常務：山田隆太郎 (島浦工場)	マルマン
21	玉置水産 (養殖)	徳	玉置 徳信 (白浜東)	マルトク
22	兵 殖 (養殖)	兵	○兵庫県に本社 ・浦城に事務所	マルヒョウ
23	佐藤水産 (加工)	日	佐藤 直博	カクイチ
24	長野水産 (加工)	井	長野 哲幸	マルイ
25	佐藤水産 (加工)	利	佐藤 木	カネキ

しまんだ(島野浦) の特徴的な方言

	方言	標準語		方言	標準語
固有名詞	みやんだ	宮野浦	副詞	ちゃん	兄さん
	すね	須美江 (須見江)		しよしゃもん	だらしのない人
	くまね	熊野江		…やん	…さん
	じゃこ	アジ		ぎゃったん	非常に 大量に
	はんさこ	イサキ		ぼくしよね	非常に
	くえ	アラ		だいしよ	少し
	ぐれ	メジナ		ことぶつつ	たくさん
	まんびき	シイラ		さっち	どうしても
	よたれ	カタクチイワシ		じき	すぐに
	ごちょう	カサゴ		とおんの (とんか)	ほんとね
普通名詞	やま	ひも (紐)	動詞	めつる	のぼせ上がる
	めんたたき	ぱちんこ (めんこ)		ほっしよけ	ほおっておけ
	せ (さい)	おかず		うどめ	速く走れ
	てんご	冗談		うどまかす	やっつける
	おおどもん	横着者		まえ	走れ
	ちゅうらくまん	おせっかい者		うだく	抱く
	よめ	好かん奴		よこう	休む
	めしつぎ	おひつ		ばる	(小便を) …をする。
	へご	ばか		くじくる	だだをこねる
	がさ	できもの		ちっとらかやす	たたく
	かざ	におい		とっぱかやす	暴れ回る
	えいや	舟 (幼児言葉)		うっとらかやす	ひっぱたく
	つじ	唾		あれぶっち	強がる・荒ぶる
	いよ	魚		えーいかん	行けない
	と	瘡蓋		つんじくる	つねる
代名詞	おっだん	おれ達	くい	こい (命令形)	
	わり (わい)	おまえ	どぶる	白をつく	
	だり	だれ	すむ	水にもぐる	
	めんめ	自分	しよみこむ	熱中して止まらなくなる	
	にゃんにゃん	お姉さん	やるしよわね	絶対にやらない	
	ほ (お) ばい	友達 (朋輩)	もぐる	やぶをくくる	
			かやす	言う	
		座る	(舟) が座礁する		

	方言	標準語		方言	標準語
形容詞（便宜的に入れてあるものもあり）	えらしい	かわいらしい	その他	なんの	なんじゃ
	どんぶなこつ	存分に		おっじゃ・おりじゃ	おれだ
	むじよなこつ	かわいい		…しゃんしたの	…したの
	さがしゆなる	元気になる（子どもが生まれる）		うまらしゆう	うまく
	うんてえー	重たい		わりもんの一	悪いものな（ね）
	きびたんがいい	気味がいい		もういったばい	もう行ったよ
	までえ	弱い		しちゃんのばい	…したのですよ
	ほぜくりあがる	ぼーっとなる（わからんようになる）		ふれ	古江（地名）
	やけた	顔が赤くなる		ぐえ	具合
	ひやきい	つめたい		どぶる	嘘をつく
	むしんね（なや）	はずかしい		…せんづき	…（も）せんで
	かしきい	賢い		ふつつる	捨てる
	かしきぼ。かしき。	こすい・ずるい		かっちよる	知っている
	だいばん	大きい		はよがんす	おはようございます
	せせまかし	せかせかした		おしまいでがんす	こんばんは
	せせろっしゃ	厚かましい		こきびたん	小気味いい
	早さまあ	早いこと		やっちやる	たたく
	しゆうしね	出しゃばり		語尾の「の」	わりもんの・さみもんの・ほんとの
	はげらしい	はがゆい		語尾の「や」	おずや・ながや・こわや
	さたけなや	ひょうきんな			
	うまらしい	うまい。うまくいった			
	むげね。むげなや。	かわいそうな			
	おろい	貧弱な			
	わらいった	うまくいった			
	なきいった	こまった			
	ちょこばい	くすぐったい			
ふを見い	様子を見よ				
その他	行こおる	行きつつある			
	いんじよる	帰っている			
	いんてえ	帰りたい			
	ぎやったんなもんじゃと	大変なものだそうだ			
行くのん	行くのだ				

平成23年度の写真より・・・



平成24年度の写真より・・・



皆既日食観測会（5月）



3激会（2月）



地域の方の話を聞く会：片野智子さん講演会（9月）



遠足下見（沖ノ平：2月）



別れのテープ（3月）

平成25年度の写真より・・・(過去も含む)



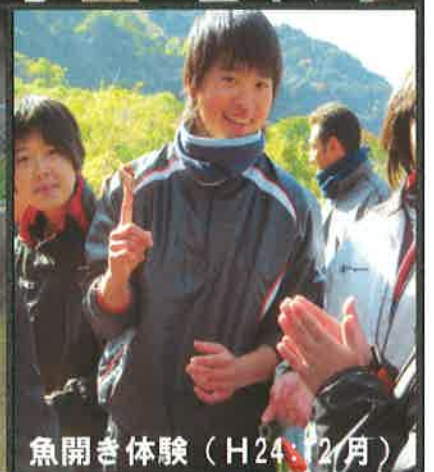
ロープ結び体験(5月)



魚開き体験(12月)



運動会：野球部(9月)



魚開き体験(H24:2月)



運動会：卓球部(9月)



運動会：バレー部(9月)



秋祭り・獅子舞を終えて(11月)



番観音にて(H24:2月)



平成 25 年度遠見場祭りより (H26, 2, 16)

島野浦の絶景(選)



宇治：夕暮れ時のライオン岩



高速艇からの夕日



墓ノ谷の桜



霊場17番のベンチより(沖の小島・日井)



霊場16番(千手千眼観世音)



波越からの風景



霊場17番(十一面観世音)



遠見場の桜



霊場7番(如意輪観世音)



沖の平神社上より



遠見場から学校へ下る途中の躑躅



須佐白の浜から宮野浦



秋祭りⅠ（エーコン・エーコン）



秋祭りⅡ（太鼓台）



秋祭りⅢ（昼：会場パレード）



秋祭りⅣ（小学生のソーラン）



秋祭りⅤ（中学生の獅子舞）



秋祭りⅥ（夜の灯船）



霊場7番からの中央港



中央港の灯船（事平丸）



霊場7番からの高島・深島



夕暮れの宇治港（手前は春日丸）



3月別れのテープ（宇治港）



遠見場山の桜（眼下：宇治港）

編集後記

島野浦には悠久の歴史がある。平成25年の今なおここに住む人々の生活の中にその歴史を感じ取ることができる場面が数多くある。新年の「元旦祭」に始まり、2日には厄年の人々の厄祓いとしての「正月のみかん投げ」、2月には、神官・氏子総代・区役員・組長達が神社にこもり火災予防を祈願する「お日待ち」を行い、3月には遠見場山の地藏祭である「遠見場祭り」が行われる。4月には「戦没者慰霊祭」。区民や組長、各事業所長らが神社に集まり、しめやかにに供養を行う。7月には、海に御神酒を捧げ、大漁と漁の安全を祈願する港祭りが行われる。8月の盆の時期には、初盆を迎えた家庭が、神社下に集まり、供養踊りを踊る。昔から続いている伝統行事である。そして今はなき「ゆりこん柱」も大祭の折には立てられ、昔の名残をとどめている。しかし、何と言っても1年の中で島民の気持ちが一番滾るのは「島野浦神社大祭」、神社下の広場での御輿と太鼓台の激突からは、大海の中で、漁師や海に携わりながらこの島に生きてきた人たちの情熱と力を感じることができる。

このような素晴らしい島野浦の伝統を学校にも記録して留めたいと思ったのが始まりである。残念なことに本校には、このような島のことを記録した文献が残っておらず、様々なところに聞いてみると、漁協や島野浦区の事務所にあることがわかった。山本前区長さんや漁協の方々の好意で、諸資料を借用することができた。いろいろな文献や資料を見ていくと次々に新鮮な事実が目に入ってきた。やっているうちにだんだんとこの作業にはまり込んでいく自分がいた。

本年度の改訂版には、昨年の修正に加え、島野浦の屋号と主な漁業種別の船舶名を書き加えてみた。私の努力不足もあり、全ての屋号と船名を書くことができなかったことは深くお詫びしたい。また、充分気をつけたつもりではあるが、中に失礼にあたる表現があるかも知れない。その点については、平にご容赦願いたい。まだまだ私の知らない文献や資料があり、記録すべきことは多々あると思われるが、僅か3年間の在職期間では書き尽くすことができなかったことを残念かつ申し訳なく思う。

最後に、島野浦中学校に過去勤務されていた諸先輩方の記録や様々な情報を提供して下さった山本前区長や岩田漁業協同組合長をはじめとする多くの島の方々には感謝申し上げたい。

平成26年 3月吉日
島野浦中学校教頭 崎田 浩二

参考文献と協力いただいた方々

【参考文献】

昭和58年度	「しまんだの教育」より	資料収集・編集者（昭和58・59年度島中にて）
昭和58年度	「しまんだ」より	校長 古川 昌晴 氏 教頭 磯部 功一氏
平成 8年度	「郷土 島野浦」より	編集・著者 渡部 誠一郎 氏（島中にて）

《資料・情報提供をいただいた方々》

島野浦区前区長	山本 万興 氏	島野浦在住	塩谷 博通 氏
島野浦漁業協同組合組合長	岩田 末幸 氏	島野浦在住	木津 龍馬 氏
島野浦漁業協同組合	清本 友一郎 氏		他 多数の皆様方
島野浦加工組合組合長	城野 保忠 氏		
島野浦郷土史研究家	結城 豊廣 氏	監修	岩田 末幸 氏
島野浦在住	岡田 昌衛門 氏		